

# 〈対話法〉の研究と普及活動20年のあゆみ

対話法研究所所長・心理カウンセラー 浅野 良雄

## I. 〈対話法〉の発案と概要

〈対話法〉は、心理カウンセリングの技法として知られる「傾聴」や「共感」を、より具体的な行為として定義（操作的定義）した「確認型応答」と、それ以外の応答を意味する「反応型応答」とによって説明されるコミュニケーションの理論と技法の総称である。

「自分の考えや気持ちを言う（反応型応答）前に、相手が言いたいことの要点（に対する自分の理解が合っているかどうか）を、（想像や推測を交えて）相手に言葉で確かめる（確認型応答）」ことを〈対話法〉の原則としており、誤解や伝達ミスの予防と信頼関係の構築に役立つとされている。

筆者が、〈対話法〉の元となる理論を発案したのは1994年3月5日である。当時、非常勤講師をしていた前橋市内の受験予備校の一室で生徒を待つ間、ジェンドリンの著書『フォーカシング』を読んでいたときのことである。今年で、ちょうど20年が経過した。

〈対話法〉という名称は発案直後から使っていた。なお、〈対話法〉を括弧付きにしているのは、普通名詞としての対話法と区別するためである。そして「確認型応答」と「反応型応答」という用語は2002年から使われ始めた。それ以前、現在の確認型応答は「要点確認」や「要点確認技法」と呼ばれていた。確認型応答以外の応答の総称を「反応型応答」としてから、〈対話法〉の理論は一層シンプルになった。

〈対話法〉の原則（練習方法も含めて〈対話法〉と呼んでいた時期もあった）も数々の変遷をたどった。発案直後の印刷物「こころの通う対話法」（1994年4月12日初版）では、「対話法：原則的に、相手の気持ちを確認してから自分の意見や気持ちを言う」であったが、直後に「対話法の原則：相手が言いたいことを確認してから自分の考えや気持ちを言う」（5月24日改訂版）に修正した。「こころの通う〈対話法〉」Ver.3（1997年2月版）では「対話法の原則：自分の考えや気持ちを言う前に、相手が言いたいことを確認する」となり、2000年9月1日発行のVer.5.0から、「自分の考えや気持ちを言う前に、相手が言いたいことの要点を、相手に言葉で確かめる」となり、Ver.6では、「自分の考えや気持ちを言う（反応型応答）前に、相手が言いたいことの要点を、相手に言葉で確かめる（確認型応答）」となった。また、〈対話法〉をコンパクトに解説したA4版1枚の資料「〈対話法〉のすすめメッセージ」Ver.1が、2003年2月25日に発行され、2013年12月21日に発行された最新版Ver.4.2から、前述した形になった。このように、〈対話法〉の原則は少しずつ進化したのである。

〈対話法〉の基本練習では、3人を一組として、「発言者」（発案当初は「主張者」と呼んでいた）「確認者」「観察者」に分けて「確認型応答」の練習を集中的に行う。カウンセリング研修でのロールプレイングに似ているが、大きな違いは、「発言者」「確認者」という役割の呼称と、それらが3～5分ごとに交代するところにある。〈対話法〉の発案後、しばらくの間は、研修会などで3人一組の練習を指導していたが、後に、一人の発言に対して他のメンバーが「確認型応答」をする練習法が主になった。なお、この練習法を応用したのが、後述する「対話の会」である。

II. 各地での普及活動（勉強会・研修会・対話の会）

〈対話法〉が発案された10日後の3月15日、かねてから筆者が講師を務めていたカウンセリング学習会「あすなる」（桐生）の例会で、初めて〈対話法〉の練習を試みた。従来は「共感」として指導していた行為を「確認」に置き換えたことにより、参加者の習得が容易になることを実感した。3月18日、「桐生カウンセリング学習会」（境野公民館）においても試みた。4月12日、筆者が〈対話法〉を指導する「対話の会」が、桐生市立中央公民館を主会場として発足した。この段階で〈対話法〉という名称を用いなかった理由の一つは、まだ市内で広く知られていない〈対話法〉が宗教活動であるとの誤解を受けないためであった。1997年6月1日、自宅の一室に、筆者を所長とする「対話法研究所」を設立し、活動の拠点とした。2001年4月6日、筆者以外の協力者が交代で世話人を務める「対話の会」（2004年4月1日、桐生対話法研究会に改称）が発足した。筆者が講師を務める研修会は東京でも始まった。2003年8月16日～17日の2日間、台東区の谷中で、第1回東京〈対話法〉研修会が開かれた。3回目からは、2006年に開設した「対話法研究所・東京事務所」（文京区本郷）を会場として、

2006年10月29日から2013年7月28日まで、合計86回、のべ356人が参加した。2004年1月1日、日本対話法研究会（理事長：浅野良雄）を設立し、2007年8月4日に、京都教育文化センターで第1回全国大会を開いた。全国大会は、その後、東京都内で2回開かれたが、会員が全国に点在しているので、1つの場所に集まるのが困難なため、現在は、インターネットを介しての交流のみとなっている。2009年11月29日、確認型応答を学びながら、こころのリフレッシュを目指すことを目的とした新たな「対話の会」が、桐生市民活動推進センター「ゆい」を主会場として始まった。この会は、1994年に始めたものとは目的が異なり、場の安全を守るためのルールに賛同して集まった参加者が交代で進行役を務めるため、必ずしも専門職がいなくても、参加者同士でこころのケアができる場となっている。また、不定期開催の「対話の会」は全国各地で開かれている。その一つが、2010年11月23日に開かれた第1回「対話の会in東京」である。その際、東京新聞による取材があり、12月1日の紙面に掲載された。その後も都内で数回開催されたが、特筆すべきは、2011年3月に発生した東日本大震災により都内に避難していた被災者と支援者が語り合うことを目的とした「東日本大震災・対話の会」である。9月23日、文京シビックセンター内のアカデミー文京・学習室を会場に20人が参加した。さらに筆者は、被災地で支援活動をする「ふんばろう東日本支援プロジェクト」（代表：西條剛央氏）にも参加した。その一つが、2011年11月19日、石巻市鮎川の中学校で保護者を対象として開催した「対話の会」である。その後、東松島市の仮設住宅内の集会室でも開いた。また、このプロジェクトから派生した個人的な繋がりにより、気仙沼市内の仮設住宅でも開催した。

### Ⅲ. 主な講演と研修活動

〈対話法〉の発案直後は、地元のカウンセリング学習サークル、PTA、医療機関などが主催する講演（練習を含む）が多かった。その後、インターネットの活用が活発になると、全国各地から招かれるようになった。そして、ここ数年は、メンタルヘルスやヒューマンエラー対策への〈対話法〉の活用が注目されて、企業から招かれる機会が増えてきた。ここで、そのいくつかを紹介する。

2002年7月16日から、朝日カルチャーセンター・横浜が主催した「確かな人間関係を築く〈対話法〉入門」という4回シリーズの講座で講師を務めた。2006年6月6日から、「足利いのちの電話」の相談員養成講座に講師として招かれ、〈対話法〉を応用した

相談技法を指導した。これは4年間続いた。2007年12月17日、特定NPO法人「失敗学会」第6回年次大会（会場：工学院大学新宿キャンパス）で「失敗を予防し、失敗を活かし合う〈対話法〉：メンタルヘルスとヒューマンエラー対策への提言」を講演した。2008年9月24日～26日、昭和大学薬学部の大学院生を対象としたコミュニケーション実習で、〈対話法〉を含めた理論と技法を指導した。翌年からは、歯学部の兼任講師として、学生を対象としたコミュニケーション実習を担当した。足掛け3年間、昭和大学に関わった。大学関係では、他にも、新潟医療福祉大学健康栄養学科の学生（2008年）や、県立広島大学保健福祉学部看護学科の教員（2011年）を対象に、〈対話法〉を中心としたコミュニケーション技法を講義した。2012年7月19日、社団法人「日本電気協会」が主催する電気関係事業安全セミナー（会場：東京商工会議所ビル・東商ホール）で、「コミュニケーションの向上による対人関係の改善とヒューマンエラーの防止」を講演した。この内容は、協会が発行する雑誌に掲載されたため、首都圏の大手私鉄や総合電機メーカーでの、ヒューマンエラーをテーマとした講演の実現に繋がった。2012年12月6日、一般社団法人「日本能率協会」が主催するセミナー（会場：コンベンションルームAP浜松町）で、「ヒューマンエラーを予防・防止するコミュニケーション技法」を講演した。2014年10月10日、桐生地区産業安全衛生大会で、地元の企業人を対象に記念講演をした（演題：ヒューマンエラーを防ぐコミュニケーション：職場ぐるみで取り組む「確認型応答」）。これは、地元での小さな活動から始まった〈対話法〉が、一回り大きくなって地元に戻ってきたことを象徴するような講演であった。

なお、ここで特筆したいのは、筆者が相談員をしている、独立行政法人労働者健康福祉機構・群馬産業保健総合支援センターによる、〈対話法〉への理解と協力である。筆者が担当するセンター主催のセミナーでは、当初、カウンセリング技法の一つとして〈対話法〉を紹介していたが、最近では、〈対話法〉をメインテーマとするセミナーが増えてきた。また、東京を拠点とする全国的なネットワークである「コミュニティケア活動支援センター」（佐藤修事務局長）のメンバーからの理解と協力も大きい。筆者も、この活動に参加しているため、東京、長野、京都、福井、熊本など、全国各地のメンバーが活動をしているNPO団体などから招かれることが多い。

### Ⅳ. 筆者以外が中心となった活動

福島県二本松市で、2002年2月1日に、福島対話法

研究会（代表：藤本かおり氏）が、確認型応答の練習を主目的とした活動を始めた。桐生以外での継続的な練習会は、これが初である。また、藤本氏は、県内各地で講演活動をしてきたが、2011年に起こった東日本大震災による東京電力福島第一原発の事故により活動を中止せざるをえなくなり、現在に至っている。

新潟県上越市では、2003年3月2日に、上越〈対話法〉研究会（代表：江川律子氏、当時、上越市立高士小学校養護教諭）による練習会が始まった。その後、この活動は地域に定着して、上越市周辺は、群馬県内に次ぐ〈対話法〉の普及地域となっている。なお、江川氏が、職場での〈対話法〉を用いた活動をまとめた研究実践論文「養護教諭の職務の特質と保健室の機能を生かした健康教育への取り組み」は、新潟県学校保健会による2006年の石浜賞第一席を受賞した。さらに江川氏は、上越市を中心に、県内各地で〈対話法〉の講演や研修活動を行っている。また、会員の一人である小学校の教員は、授業や子どもたちへの教育指導の一部で〈対話法〉を活用して成果をあげている。

福岡県では、焼山和憲氏（当時、西南女学院大学看護学科教授）が、患者とのコミュニケーション実習の一部に〈対話法〉を取り入れた。焼山氏は、のちに福岡大学に移り、医学部看護学科における授業の一部に〈対話法〉を取り入れている。また、福岡大学では、学生の自主的な活動を大学が支援する「学生チャレンジプロジェクト」が実施されており、2009年度には、看護学科の学生が中心となった「あなたのそばに私がいる：独りぼっち高齢者ゼロ作戦」が支援活動の一つに選ばれた。この活動では、地域在住の高齢者とのコミュニケーション技法の一つに〈対話法〉が用いられている。

鳥根県では、安部良治氏（当時、浜田教育センター指導主事）が、センターが主催するカウンセリング研修会などで、〈対話法〉を取り入れた教育相談技術を指導した。

他にも、筆者以外がファシリテーターを務める「対話の会」は、地域の有志が中心になって、東京都板橋区、長野県御代田町、群馬県前橋市でも開かれている。

## V. 研究活動

〈対話法〉は、特定の理論や技法の学術的な研究から導かれたものではなく、筆者が学んだカウンセリング研修やカウンセラーとしての実践から発案されたものである。そのため、当初は、〈対話法〉を学術的な研究対象として扱う気持ちはなかった。ところが、1997年に、ぐんまカウンセリング研究会から「ヘルスサイエンス研究」が創刊されたのを機に、「カウ

ンセリングにおける〈対話法〉の適用事例」<sup>1)</sup>を執筆した。内容は、発案の経緯と練習方法、対人関係に悩むクライアントや不登校の子どもへの接し方の一つとしての〈対話法〉の指導、こころの交流の場としての「対話の会」の活用事例である。2002年には、清水敦彦氏（当時、足利短期大学教授）との共著で「高齢者介護施設職員への〈対話法〉の試み」<sup>2)</sup>を発表した。ところで、〈対話法〉の発案以来、実践的な成果をあげてきたものの、コミュニケーション技法の効果を数値化する手法が少ないため、〈対話法〉の効果を実証する研究は困難であると考えていた。そのような中、2002年にノーベル化学賞を受賞した田中耕一氏の研究（ソフトレーザーによる質量分析技術の開発）に触発されて、測定方法自体を自分で工夫することを考えた。その試みが「〈対話法〉スキルの到達度を判定するための尺度作成」<sup>3)</sup>である。この研究をきっかけに、〈対話法〉の効果を数値化する研究に目が向いた。「対話における応答の一致度とラポール維持との関係」<sup>4)</sup>では、聞き手による応答の内容が、話し手が伝えたい気持ちと必ずしも一致していなくても、ラポールが維持されることを示した。また、確認型応答と反応型応答を理論的に解説した「カウンセラーの応答を確認型と反応型に分類する試み」<sup>5)</sup>を著した。仮想の対話を記載した質問紙を用いて応答の好感度を測定することにより、反応型応答と比べて確認型応答の方が好感度が高い傾向にあることを示した初めての研究が「対話における確認型応答の心理的効果」<sup>6)</sup>である。この研究は、カウンセリングでなくコミュニケーションの観点から心理的な効果を論じているところに特徴がある。つぎに、確認型応答の訓練による効果を、心理尺度を使って測定した研究が「傾聴訓練が高校生の孤独感と学校生活満足度に及ぼす効果」<sup>7)</sup>と「確認スキルの訓練が高校生のコミュニケーションスキルに及ぼす効果」<sup>8)</sup>である。これらは、ホームルームの時間に、一定期間、教員の指導によって確認型応答を用いた対話を練習してもらい、その前後において、心理やスキルの変化を測定した研究である。これらの研究により、確認型応答の効果がある程度実証できたことを受けて、カウンセリングにおける傾聴・共感（感情移入的理解）の技法と確認型応答との関連について改めて論じたのが「カウンセラーの態度と技法を確認型応答という概念から考察する試み」<sup>9)</sup>である。そして、確認型応答と反応型応答の好感度の違いを、さらに対象者と心理状態の条件を増やして測定した研究が「聞き手の応答が話し手に与える好感度を質問紙によって測定する試み：確認型応答と反応型応答の心理的効果」<sup>10)</sup>である。そして、医療者が患者

とコミュニケーションをとる際に重要な共感を分かりやすく指導する方法として確認型応答を提案したのが「共感的態度を評価するための一方法：確認型応答という概念の導入」<sup>11)</sup>である。また、〈対話法〉を英文でまとめておくことも重要だと考えて“The Idea of Two Types of Responses in Active Listening : An Introduction to Confirmative Response and Reactive Response”<sup>12)</sup>を著した。確認型応答と反応型応答の好感度の違いを、さらに対象者を増やして、また、場面と対象者の心理状態の設定を複数にして測定したのが「相談者の心理状態と相手からの応答様式が応答への好感度に与える影響」<sup>13)</sup>である。この研究の結果、相談者の心理状態（そのときの気分が良いか悪いか）に関わらず、確認型応答は、反応型応答と比べて好感度が高い傾向にあるという仮説が支持された。そして、従来からある傾聴と共感にまつわる課題を改善するために確認型応答という概念を導入する意義についてまとめたのが「カウンセラーの応答における傾聴と共感の定義をめぐる課題：『確認』という視点の再評価」<sup>14)</sup>である。

## VI. 学会参加

〈対話法〉の研究を深めることと、〈対話法〉の意義を専門的な視点から検証してもらうために、全国規模の学会で多数の発表をした。〈対話法〉は、人間が関わるあらゆる場面に共通する技法であるため、学会もさまざまな専門分野に渡るが、主に、医療、コミュニケーション、教育関係の学会が多かった。

コミュニケーション関係では、2004年11月27日、「日本コミュニケーション学会」東北支部研究大会（会場：東北工業大学）で発表した。この学会は、広くコミュニケーションを研究する専門家が集う我が国最大級の学会である。2005年11月5日、第6回東北支部研究大会（新潟市内）で、ワークショップ形式で〈対話法〉を講演した。2007年6月16日、第37回年次大会（会場：西南学院大学）で「傾聴訓練が高校生のコミュニケーションスキルに与える効果」を口頭発表した。2008年8月2日、「国際コミュニケーション科学学会」第7回大会（熊本県八代市）で“The Psychological Effect of Confirmative Response and Reactive Response in Dialogue”を口頭発表した。発表は日本語であったが、ロナルド・ゴードン氏（ハワイ大学教授）が関心をもって来て、会期中の空き時間を利用して英語で意見交換をした。2009年9月12日、「日本ビジネスコミュニケーション学会」第1回年次大会（会場：拓殖大学文京キャンパス）で「確認型応答の研究と普及活動」を発表した。

他に、2005年1月8日、「臨床教科教育学会」第3回臨床教科教育学セミナー（会場：上越教育大学）での「〈対話法〉を応用して共感能力を育てる授業」、2010年7月30日、「日本医学教育学会」第42回大会（会場：都市センターホテル）での「確認型応答という概念の紹介と応答を区別する練習ソフトの開発」の発表などがある。

国外でも発表を行った。2008年3月27日～29日（現地時間）に、「国際リスニング学会」（International Listening Association : ILA）第29回年次大会（会場：米国メイン州ポートランド市内）に参加した。ここでは発表はしなかったが、〈対話法〉を解説した英文の資料を持参した。それを見た、元ILA会長のウェイン・ボンド氏（当時、モンククレア州立大学）が関心をもって来て、個人的に意見交換をした。翌年の2009年3月19日～21日（現地時間）に参加した第30回年次大会（会場：米国ウィスコンシン州ミルウォーキー市内）で“The Idea of Two Types of Response Facilitates Teaching of Listening”と題して、傾聴スキルの訓練における〈対話法〉の有効性を口頭発表した。さらに翌年、2010年3月25日～27日（現地時間）に参加した第31回年次大会（会場：米国ニューメキシコ州アルバカーキ市内）で、“Exercise in Classifying Types of Response as Confirmative or Reactive”と題して、2つの応答を区別するための練習法を、実習を交えて口頭発表した。

## VII. インターネットを利用した活動

〈対話法〉の普及活動は、インターネットも駆使して進められてきた。今から20年前の1994年に筆者が発案して、一人で普及活動を始めた〈対話法〉が、その後、ここまで広がったのは、1995年秋のWindows 95の発売を一つのきっかけに加速したパソコンとインターネットの普及によるところが大きい。

その一番が、ホームページ（以下HPと略す）である。1999年6月6日、筆者としては初めての個人HPになる「心理カウンセラー浅野良雄の部屋」を開設した。2001年10月3日、HPの名称を「対話法研究所」に変更した。2003年12月7日、「日本対話法研究会」のHPを設置した。これは、2004年7月14日に、内閣府の「ボランティアウェブ」に登録された。さらに、2006年8月8日には、Yahoo!の登録サイトに掲載され、それと同時にオススメサイトにも選ばれた。2007年1月4日、独自ドメインを取得して、対話法研究所のHPのURLを、<http://www.taiwahou.com/>にした。

2001年10月31日、〈対話法〉に関心がある人同士で交流するためのメーリングリスト「人間関係と〈対

話法) ML」を開設した(現在の参加者数125人)。

〈対話法〉の解説や筆者の活動報告、また、イベントの告知をするためのメールマガジンも複数発行した。初めてのメールマガジンは、2001年11月30日創刊の「こころの通う〈対話法〉入門」であった。その後、「メール時代の対話法」「こころとコミュニケーションを語る」「カウンセリングという名の対話」「カウンセリングと〈対話法〉」「暮らしの中の〈対話法〉入門」などを発行して、現在に至っている。なお、有料のメールマガジンとして、2002年2月3日、まぐまぐプレミアムから「こころの通う〈対話法〉練習室」を創刊した。これらメールマガジンの読者の合計は最大で5,000人を越えた。

ブログとしては、日々雑感を記した「暮らしの中の〈対話法〉」(2006年5月9日開設)と「対話法入門講座」がある。

SNS(ソーシャル・ネットワーキング・サービス)では、2006年6月1日、mixiで「対話法」のコミュニティを開設した(現在の参加者122人)。2009年9月14日、Facebookに参加(現在の友達326人)、2010年4月10日、Twitterで初ツイートした(現在のフォロワー1,198人)。これらは、〈対話法〉の活動報告や参加者との交流に使っている。

インターネットを使って〈対話法〉を体験したり、「確認型応答」を練習するための一方法として考えたのが、2001年11月23日にHPで公開した「対話の流れバーチャル体験室」である。これは、相手の発言に対して、どのような応答をすると、どのような展開になるかを、HTML言語を使ってシミュレーションしたものであり、各自がブラウザを使って閲覧できる。

2006年6月18日、パソコンを使って、確認型応答と反応型応答とを区別する練習ができる「〈対話法〉PC体験室ソフトウェア(一般版)」を公開して、誰もが無料でダウンロードして使えるようにした。2006年8月12日には、〈対話法〉練習会の様子をイラストと台詞で再現した「〈対話法〉バーチャル練習会」を公開した。2010年8月4日、「〈対話法〉PC体験室ソフトウェア(医療従事者版)」を公開した。

インターネットといえども、〈対話法〉の体験や確認型応答の練習はリアルタイムで行うのが効果的であると考え、2002年12月2日、「チャットルーム・オンライン対話の会」を設置した。これは、遠隔地の人同士で「対話の会」の雰囲気を経験してもらうことが目的である。他にも、Skype、Twitter、掲示板を使って「対話の会」や練習会を試みたが、長く続かなかった。そして、2013年1月3日、チャット「対話の会」を再開して現在に至っている。

〈対話法〉の解説や活動実績などをまとめた動画(静止画とテキストで構成)、「5分で分かる〈対話法〉」を制作して、2014年1月にYouTubeで公開した。また、2014年7月12日に筆者が上越市内で行った講演を編集した動画が、YouTubeで公開される予定である。

## VII. マスメディアでの紹介

〈対話法〉がマスメディアに初めて登場したのは、1995年12月23日の「上毛新聞」読者投稿欄「ひろば」である。筆者が、「実りある話し合いを」というタイトルで、「自分の意見を言う前に『相手が話した内容のポイントをまとめて相手に確認する』ことが、対話法の唯一の約束ごとです」と紹介した。ラジオでは、2000年12月14日、NHK前橋放送局のローカル番組に電話出演して、著書『輝いて生きる』を紹介したのが最初である。また、2008年12月21日、東京の虎ノ門にある、ラジオNIKKEIのスタジオで、「患者の話聞く技術：確認型応答について」が収録され、翌年の1月15日、「薬学の時間」で放送された。新聞では、2009年12月16日から2010年11月7日の間、ほぼ隔月で、「上毛新聞」の「視点 オピニオン21」というコーナーで〈対話法〉関連の話題を連載した。タイトルは、「誤解によるすれ違い：必要な双方の工夫」「誤解を防ぐには：真意を言葉で確かめて」「確認重視の対話法：医療面接の新技法に」「誤解招く言葉の多義性：応答を適切に使い分け」「会話の中の省略：小さな誤解 防ぐ工夫を」「事故と人間関係：確認型応答で改善を」「話し手の意図：通じるかは相手次第」であった。2010年12月1日、「東京新聞」の「セカンドらいふ」欄において、研修会風景の写真付きで、「達人に聞く夫婦の会話術・『確認』織り交ぜスムーズに」と題して、夫婦間の対話例と〈対話法〉の概要が紹介された。2012年1月23日、「桐生タイムス」で、「『会話』通して被災地支援：確認を織り交ぜ 信頼感生み出し」と題して、筆者と〈対話法〉の概要、東北各地での「対話の会」による支援活動の様子が紹介された。また、2012年7月10日、「東京新聞」の「ミラー」欄に、筆者による「『撤退』の真意確かめて」と題した投稿が掲載された。

他に、「上毛新聞」「桐生タイムス」、全国紙の群馬県版でも、著書『輝いて生きる』、講演、「対話の会」の告知、報告、投書などが複数回掲載された。

## VIII. 著書と印刷物

発案後しばらくは、〈対話法〉の説明と練習方法の概要が記載されたB4判1枚の資料「こころの通う〈対話法〉」を研修会などで使っていた。その後、筆

者の友人である、特定NPO法人「日本福祉教育研究所」の理事長である妹尾信孝氏との共著で『輝いて生きる』（文芸社）を出版した（2000年12月1日初版発行）。その第二部において講演記録の形で著した「このころの通う〈対話法〉」が、〈対話法〉に関する初めての書籍である。なお、妹尾氏と筆者が初めて出会ったのは、1996年12月28日に、筆者が招かれて〈対話法〉を話した「ぐんまの教育を考える会」の例会（会場：前橋市ボランティアセンター）であった。

2003年1月25日発行の『心理カウンセラーの仕事がわかる本・改訂版』（法学書院）の第5章「現場で活躍する心理カウンセラーに聞く」において、「対話法を基本として取り組む」と題して筆者の活動が紹介された。2007年6月1日、『このころの通う対話法』（株式会社まぐまぐ）という76ページの冊子を出版した。書店では売られていない直接販売であるが、HPを見て興味をもった人から申し込みがある。2008年3月10日に新潟県教育庁上越教育事務所から発行された『アクセス 学校教育に関する所見』No.50の国語科の「授業改善ワンポイント」というコーナーで「確認型応答」が紹介された。2008年11月1日、『医療従事者のコミュニケーション：実習と指導の手引き』（株式会社まぐまぐ）を出版した。これは、昭和大学薬学部でのコミュニケーション実習で使用した資料が元になっている。2009年10月31日、青海社が発行する『緩和ケア』Vol.19（10月増刊号）「緩和ケアをともに学ぶ、教える」に、「学びやすく教えやすいコミュニケーション技法：確認型応答の提言」が掲載された。2012年10月15日、社団法人「日本電気協会」が発行する『生産と電気』10月号の特集「ヒューマンエラーのさまざまな要因を絶つために！」に、「コミュニケーションの向上による対人関係の改善とヒューマンエラーの防止」が掲載された。

なお、印刷物ではないが、〈対話法〉を可視化するための一環として、2013年5月、「確認型応答」と「対話の会」という文字を中心に配置した「ミニのぼり旗」を制作した。それ以降、筆者の講演では、必ず「ミニのぼり旗」を演題の上に置いて、〈対話法〉のポイントを視覚的にも強調するよう努めている。

こうして、〈対話法〉は、北は北海道から南は沖縄まで、さまざまな形（講演会・研修会・対話の会・書籍の販売など）で全国42都道府県に伝わっている。

（2014年10月31日現在）

## 文献

- 1) 浅野良雄, カウンセリングにおける〈対話法〉の適用事例, ヘルスサイエンス研究, 1(1), 7-13, 1997

- 2) 清水敦彦・浅野良雄, 高齢者介護施設職員への〈対話法〉の試み, 足利短期大学・研究紀要, 22(1), 1-7, 2002
- 3) 清水敦彦・浅野良雄, 〈対話法〉スキルの到達度を判定するための尺度作成, 足利短期大学・研究紀要, 23(1), 15-19, 2003
- 4) 浅野良雄, 対話における応答の一致度とラポール維持との関係, ヘルスサイエンス研究, 7(1), 47-50, 2003
- 5) 浅野良雄, カウンセラーの応答を確認型と反応型に分類する試み, ヘルスサイエンス研究, 8(1), 59-62, 2004
- 6) 浅野良雄, 対話における確認型応答の心理的効果, 北出亮他編 日本コミュニケーション学会創立35周年記念論文集, 13-23, 2006
- 7) 浅野良雄, 傾聴訓練が高校生の孤独感と学校生活満足度に及ぼす効果, ヘルスサイエンス研究, 11(1), 3-11, 2007
- 8) 浅野良雄, 確認スキルの訓練が高校生のコミュニケーションスキルに及ぼす効果, スピーチコミュニケーション教育, 21, 97-111, 2008
- 9) 浅野良雄, カウンセラーの態度と技法を確認型応答という概念から考察する試み, 足利短期大学・研究紀要, 28(1), 61-66, 2008
- 10) 浅野良雄, 聞き手の応答が話し手に与える好感度を質問紙によって測定する試み：確認型応答と反応型応答の心理的効果, ヘルスサイエンス研究, 12(1), 85-88, 2008
- 11) 浅野良雄, 共感的態度を評価するための一方法：確認型応答という概念の導入, 医学教育, 41(3), 175-178, 2010
- 12) 浅野良雄, The Idea of Two Types of Responses in Active Listening : An Introduction to Confirmative Response and Reactive Response, 足利短期大学・研究紀要, 31(1), 35-38, 2011
- 13) 浅野良雄, 相談者の心理状態と相手からの応答様式が応答への好感度に与える影響, 足利短期大学・研究紀要, 33(1), 89-96, 2013
- 14) 浅野良雄, カウンセラーの応答における傾聴と共感的定義をめぐる課題：「確認」という視点の再評価, ヘルスサイエンス研究, 17(1), 5-10, 2013

※

※

## The Twenty Year's History of the Study and Activities of Dialogue Method

Yoshio ASANO